

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04518

研究課題名（和文）教員養成・現職教育におけるピア・グループ・コンサルテーション（PGC）の開発

研究課題名（英文）Research and development of the peer group consultation in the process of teacher education

研究代表者

庄井 良信（Shoi, Yoshinobu）

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00206260

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、フィンランドと日本との共同研究を通して、教師教育におけるピア・グループ・コンサルテーション（Peer Group Consultation: PGC）の理論を開発することであった。その結果、私たちは、臨床教育学の視座からPGCの新たな概念モデルを構想することができた。その概念モデルに基づいて、高等学校教諭及び小学校教諭と共に8つのデザイン実験を行った。臨床事例に関する多声的な協働省察を行うことを通じて、教員養成・現職教育におけるPGCの可能性について明らかにできた。この成果は、大学院における高度専門職業人養成プログラムの開発に貢献するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の教員養成・教師教育の現場で、臨床的に応用可能なPGC（ピア・グループ・メンタリング）の概念モデルを構想することができた。臨床的次元からの教職能力開発に関する理論の構築は、内外を問わず国際的にも独創性の高い研究成果となった。その結果、PGCを基軸にした教師教育者（大学教員）と現職教師（実践者）との互恵性のあるエンパワーメントシステム（新たな次元のメンタリング）の可能性も明らかになった。これは教育系の大学院における現職教師研修や教職大学院における高度職能開発プログラム開発にも新たな示唆を与えるものとなる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop the theory of Peer Group Consultation (PGC) in teacher education through collaborative research between Finland and Japan. As a result, we were able to envision a new conceptual model of PGC from the perspective of clinical pedagogy. Based on the conceptual model, we conducted eight design experiments with high school teachers and elementary school teachers. Through a multi-voiced collaborative reflection on clinical cases, we were able to clarify the possibility of PGC in teacher training and in-service education. This achievement can contribute to the development of highly qualified professional training programs in graduate schools.

研究分野：臨床教育学

キーワード：ピア・グループ コンサルテーション 教師教育 教師のエンパワーメント メンタリング デザイン
実験 臨床教育学 フィンランド

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1 研究開始当初の背景

(1) 高度専門職業人養成(教師教育)のカリキュラム開発

専門職大学院(教職大学院)の拡充,教職・教科専門を機軸とする既設大学院の改組,基礎研究と臨床研究とを架橋するリサーチベースの教育系博士課程の構想等を通じて,教員養成の質保障と共に,現職教員の生涯にわたる高度な研修と学びの環境構成が重要な課題となっていた。養成・採用・研修の改善が一体的に問いなおされ,教員免許更新制度と大学院レベルの基礎研究や臨床研究との有機的な関連性が根本的に問い直されて,日本において教員養成・現職教育カリキュラムのマクロレベルでの構造的な見直しと,ミクロレベルでの臨床的な開発が,焦点の研究課題となっていた。

これらの研究課題は,これまでも,日本教育学会の複数の課題研究委員会や特別課題研究委員会をはじめ,日本教師教育学会,日本教育方法学会,日本臨床教育学会等でも繰り返し議論が重ねられていた。しかし,大学院の修士課程・博士課程における高度な現職教師教育カリキュラムに関する研究は,十分に展開されているとは言い難い状況であった。また,現職教師教育の理念や政策・制度に関する諸研究には重要な提言が含まれていたが,その臨床事例に基づく実践的なカリキュラムの開発やその教育学的検討は,まだ十分には深められていなかった(日本教育学会・特別課題研究委員会研究報告書『現職教師教育カリキュラムの教育学的検討』2011年)。

(2) ピア・グループ・コンサルテーションに関する国際共同研究

申請者は,これまで一貫して,L.S. ヴィゴツキーの発達援助思想を再考し,その教育学的展開の可能性を探究してきた(拙著『ヴィゴツキーの情動理論の教育学的展開に関する研究』風間書房,2013年)。また,工房(atelier)様態のコンサルテーション型の参画研究を通して,学校現場の教師と協働しながら,生徒指導・教育相談の研究や授業の研究を遂行してきた。

一方,申請者は,臨床教育学の視点から現代社会における教師の専門性を問い直してきた(『臨床教育学序説』柏書房,2002年)。学校教員の高度な職能開発については,科学研究費補助金の助成を受けた共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の運営も担当してきた。その議論のなかで,教師教育者(teacher educator)が参画する「教育実践へのピア・グループ・コンサルテーション」(PGC)の意義と可能性について構想し始めていた(『創造現場の臨床教育学』明石書店,2008年,共編著)。

以上のような研究活動を背景に,申請者は,フィンランドのオウル大学のマルコ・キエリネン博士(M. Kielinen)と研究交流を重ね,大学の教師教育者が,学生(教員候補者/現職教員)とピアで対話的な関係性を構築しながら,高度な臨床的实践力を涵養する職能開発カリキュラムの開発を探究してきた。また,現在,リトアニア教育大学のブレディキッテ博士(M. Bredikyte)とも,同様の研究関心をもって研究交流を進めている。

(3) 文化歴史的活動理論のナラティブ・アプローチへの展開

上記の過程と並行して遂行してきた学術的な基礎研究は,文化・歴史的活動理論(cultural-historical activity theory)を情動体験(perezhivanie)の理論やナラティブ・アプローチの位相に拡張する試みであった。それは,教員養成・教師教育における学習支援を,個体的能力の次元から多職種協働を含む活動システム構築に関する能力の次元にまで拡張することを企図したものであった。2013年9月にSydneyで開催されたISCARの国際学会において,申請者は,“Narrative conferences: As an atelier with perezhivanie for childhood educators”というテーマで,研究発表を行った。これは1990年代以降のヴィゴツキー・ルネサンスの潮流の主要な理論を,ナラティブ・アプローチの位相によって拡張しようと試みたものであった。

2 研究の目的

本研究の目的は,過去18年間にわたりフィンランドと日本との研究交流によって開発されつつあるピア・グループ・コンサルテーション(Peer Group Consultation: PGC)の思想と方法を,理論的に探究し,両国のPGCの協働省察記録と,その履修者への面接記録に基づいて,その教員養成・現職教育における意義と課題を,臨床教育学の視点から明らかにすることであった。

そのことを通じて,次の2つの観点で,大学院における課題探究型の高度専門職業人養成(教師教育)プログラムの臨床的な開発に貢献したいと考えた。

観点 : 臨床教育学の展開と教師教育カリキュラムの開発

日本の教育学研究において,心理臨床分野の1つの応用分野としてではなく,教育学固有の位相から内発的に発展してきた臨床教育学の展開がある。本研究は,教師の自己理解に基づく自己教育論として発展してきた臨床教育学研究の発展に貢献することを期待した。それが,制度的次元からの高度な教職能力開発の研究だけでなく,臨床的次元からの教職能力開発の理論構築にも貢献できると考えた。

観点：高度な教職能力のエンパワメント理論の構築

PGC を基軸にした教師教育者（大学教員）カリキュラム開発と現職教師（実践者）カリキュラムとの相互開発を行うことで、高度な教職能力のエンパワメント（teachers' empowerment）理論を構想することもできる。これは教育系大学院における現職教師の研修や教職大学院における高度職能開発プログラムの構想にも大きく貢献できるものになる。その意味で PGC の国際的な協働省察は、日本における高度な教師教育カリキュラムの構築に貢献できると考えた。

3 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究は、次のようなプロセスと方法で遂行した。

第 1 期（平成 29 年度）：PGC に関係する内外の文献を収集・精査し、教師教育者及び履修体験者の経験を考察し、教師教育カリキュラムとしての理論仮説を構築する。

第 2 期（平成 30 年度）：オウル大学教育学部及びリトアニア教育大学との共同研究を展開し、第 1 期に構築した PGC の理論仮説に基づいて、日本の研究協力校（大都市と地方都市）への参画研究や、北海道教育大学大学院教育学研究科において PGC のデザイン実験を試行する。

第 3 期（平成 31 年度）前年度までの理論仮説構築に基づくデザイン実験を継続し、教員養成や現職教師教育の現場（教職大学院等）において汎用性の高い PGC の典型モデルを臨床教育学の観点から構築する。

なお、本研究の調査及びデザイン実験の実施にあたっては、PGC プログラムの調査協力者及びその過程で言及される児童・生徒の個人情報等に関して十分に配慮し、計画、実施、発表を行った。また、データの管理には十分に注意を払い、本研究以外で用いられないことがないように、研究代表者はもとより、調査協力を得る大学院の学生にも、徹底した情報管理を行った。

4 研究成果

（1）国際的な議論に基づく PGC モデルの仮説生成

初年度は、インターネット上の双方向遠隔動画配信による研究協議を通して、フィンランドのオウル大学のマルコ・キエリネン博士と研究交流を重ね、大学の教師教育者が、学生（教員候補者／現職教員）とピアで対話的な関係性を構築しながら、高度な臨床的实践力を涵養する職能開発カリキュラムの創発に関する基礎的な文献や情報を蒐集した。また、リトアニア教育大学のブレディキッテ博士とも、同様の研究関心をもって研究交流を進めた。

その成果は、カナダのケベックで開催された ISCAR の国際学会において、Narrative poetics and Vygotsky's theory of emotions: To elucidate a scenography of "narrative learning environment" というテーマで発表し、さらに、北海道の札幌で開催された環太平洋教育国際会議において、Research field of "clinical Study of education" as an axis of curriculum development for teacher education: Focusing on the promise of "narrative learning" というテーマで発表した。また、全国学会では、日本臨床教育学会全体シンポジウム（招待有）において「情動体験の共同表象化—臨床生徒指導特別演習の履修体験語りから」というテーマで発表し、日本教育方法学会課題研究（招待有）では「語り合う身体から演劇的な意味創造へ—保幼小の失われた環（Missing-link）としてのナラティブ・ラーニング」というテーマで発表を行った。これらの学会発表とディスカッションを通して、本研究課題「ピア・グループ・コンサルテーション」の基礎理論である「文化歴史的理論のナラティブ・アプローチによる展開」と、その教師教育への応用の可能性について、国際的な視座から整理することができた。それらの成果は、その後に予定されていたデザイン実験に基づく参与観察の基礎理論となった。

次年度（平成 30 年度）は、フィンランドとの共同研究活動を通して蒐集してきた PGC 志向の教師教育実践に関する文献と実践記録データを精査し、日本臨床教育学会において「教育者（educator）としてのアイデンティティの〈新生〉—リサーチベースの探究に寄り添う教師教育者」というテーマで研究発表を行うことができた。また、蒐集した参与観察記録と理論研究のデータを、英語のトランスクリプションに変換した。それを基礎データとして PGC 志向の教師教育カリキュラムの臨床教育学的意義に関する理論仮説を構築し、その成果を、日本教育方法学会編『教育方法』第 47 巻において「教育方法学は教育実践をどのように語るのか—詩的・物語様態の定性的データに基づく省察と叙述の可能性」として公刊した。また、フィンランドのオウル大学における実地調査と参与観察の記録に基づいて、大学の教師教育者が、学生（教員候補者／現職教員）とピアな関係性を構築しつつ高度な臨床的实践力を涵養する職能開発カリキュラム開発の可能性を探究した。その成果は、北海道教育大学大学院臨床教育学研究室編『臨床教育学と保育・教育実践』第 1 号において「ピア・グループ・コンサルテーションにおけるオープン・ダイアローグの構造図」として発表した。

最終年度である令和元年度は、前年度までの研究活動の成果に基づいて、臨床教育学の観点から本研究の総括を行った。国内では、前年度までに構築した教員養成・現職教育カリキュラムに関する理論的枠組みと、ピア・グループ・コンサルテーション（PGC）におけるオープン・ダイアローグの構造仮説に基づいて、デザイン実験による PGC の実地調査を行い、研究協力者との

協働リフレクションを遂行した。国際的には、リトアニアの教育大学における「物語を紡ぐ学び」の研究と、フィンランドのオウル大学における「ウェルビーイングを促進する学習環境」の研究と連携しながら、PGC に関する国際的な共同研究を遂行した。その際、ZOOM ミーティングを活用したインターネット上の双方向遠隔システムによる研究協議と、動画による参与観察を継続し、共同研究の成果を交流し合った。

PGC の概念モデルを教員養成・現職教育に活用するために、フィンランドやリトアニアとの共同研究を通して蒐集してきた文献と実践データを精査し、北海道教育大学大学院臨床教育学研究室編『臨床教育学と保育・教育実践』第 2 号において「Ed.D.型博士課程の構想と課題」というテーマで研究論文の発表を行った。また、本研究の国際的な位置づけをさらに明確にするために「USA における Ed.D.型博士課程構想の基本デザイン」というテーマで海外調査分析表を作成した。また、日本において蒐集した参与観察記録と理論研究のデータを、一連のエピソード記録と省察として整理し、令和 2 年 3 月に、その成果を北海道教育大学大学院臨床教育学研究室編『ピア・グループ・コンサルテーション (PGC) 研究成果資料集録』として刊行した。

さらに、構築した理論仮説に基づく PGC の臨床参画実地研究を、大学院生への PGC の本格実施と現職教員への PGC の本格実施という 2 つの位相で実施し、その成果を、令和 2 年 1 月に開催された「第 26 回教育展望札幌セミナー」(教育調査研究所主催)で「理論提案」として発表した。

(2) PGC モデルにおける語り様態の転換

定量的エビデンスに基づく実践・政策研究において周縁化されやすいのが、物語様態の思考様式で語られ、叙述された定性的データである。この思考様式を刻々に媒介しているのが文学的・文芸的な形象や表現で語られる詩的言語である。この詩的言語への着目は、今回のデザイン実験において中心的な役割を果たした。それは、詩的言語が未来を構想する詩学としての機能を有しているからである。その意味で、新たな実践を構想するデザイン科学としての教育方法学において、詩的・物語様態の思考様式が有する潜在的な可能性が明らかになった。

人間において語り・物語 (narrative) の機縁が生まれるのは、その人間にとって解決することが難しい、そして予想もできなかった出来事に遭遇し、その意味を探索しながら解決を図ろうとするときである。ヴィゴツキー (L.S. Vygotsky) が情動体験 (переживание / perezhivanie) という概念で探索しようとしたように、人間は、外界から被る体験を他者と共有しうる語り・物語という記号 (表象) へと転換しながら生きる存在だからである。教員養成・教師教育では、その学問の淵源において、教育実践の総体を、寓話、逸話、談話、教育詩などの、詩的で文学的・文芸的形式を伴う語り・物語を定性的データとして記録し、再帰的に省察し、新たな理論の構築を試みてきた。

内外の詩的物語として厚い (意味深い) テキストは、教育方法学でも、語り・物語的な定性的データとして、学問的探究の対象になりつつけている。こうしたナラティブ研究が、教員養成・教師教育における語り・物語様態の定性的データに基づく探究・研究とその叙述に影響を与えつつけていることも明らかになった。例えば、学校における授業という学び合いの場では、身体と身体とが響き合い、出会い、対話しながら、知的探究の演劇が構成されている。叙事詩、抒情詩、詩劇のように展開する授業という舞台には、子どもという演者 (actor/player) もいれば、教師という演者兼演出家 (director/co-player) もいる。さらには、その一回性の演劇の監督 (supervisor) もいれば、その共約不可能な演劇作品を、多様な角度から評価し、意味づける批評家もいる。

このように知的探究の演劇としての省察的实践を、語り・物語様態の定性的データを活用しながら研究しているのが、フィンランドで開発されているナラティブ・ラーニング (以下、NLG と記す。) と、ピア・グループ・コンサルテーションである。

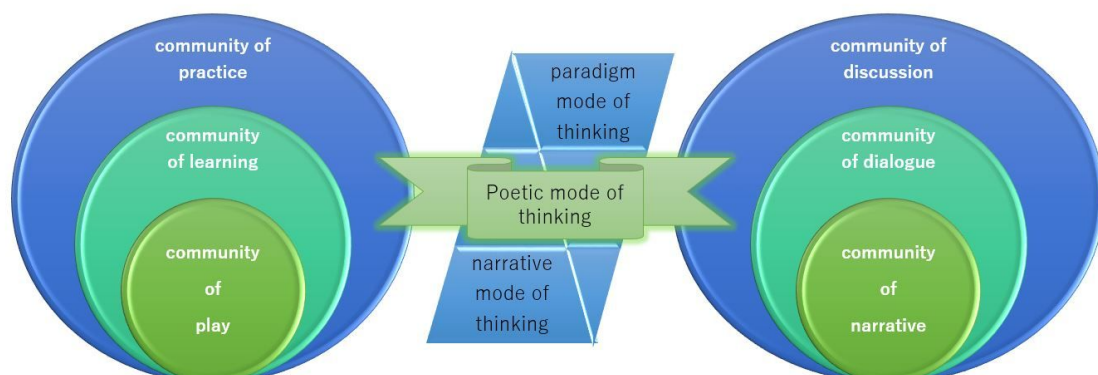


図 1) ピアグループコンサルテーション (PGC)におけるダイアログの構造

上記のように、フィンランドで構想された PGC は、大学・大学院における教育実習等で教育実践を経験した学生（学修者）と教師教育者が、理論的・実践的知識の協働的な探究者として対等・平等な関係（peer-interaction）を構築することを通して、それぞれの専門性を高度化することを目指した教師教育実践である。この場合、対等・平等（ピア）な関係性は、教師教育者と学修者との間だけでなく、学習経験に差異がある学修者どうしの間でも探究されていた。いずれの場合も、一方向の啓発的なコンサルテーションではなく、双方向の相互啓発的なコンサルテーションを志向するところにフィンランドの PGC の特徴があった。

本研究において、筆者は、生徒指導・教育相談、授業研究における PGC を、北海道教育大学大学院・学校臨床心理専攻の特別演習等において試行した。その概要は、次の通りである。まず、受講生は、自分が過去に観察・感受した教育経験—その多くは困難を伴った生活経験—に基づいて、自己の体験を一つの逸話（エピソード）として語り直す。その場を共有する参加者は、その語り手の語り・物語を、無条件の肯定的関心をもって傾聴し、原初的なイメージ言語としての詩的言語で語り手に問いかける。安心と安全が保障された学習環境の下で、筆者（大学教員）が教師教育者としてもっとも配慮しているのは、ある語り手の複雑な教育経験を傾聴している受講者が、語り手の語りを啓発的に批評することなく、また、無関心に傍観することなく、語り手と聴き手が、あたかもその語られた出来事の場合にいるかのような臨場感を持って追体験（文芸的なイメージ体験）できるような環境を演出しつつ構成することであった。

このように試行された PGC において、教師教育者は、安心と安全が保障された擬似演劇舞台を演出しつつ、参加者どうしが、原初的な言葉あるいは身体的な言語としての性格が強い詩的言語を交わし合い、その聴き合いと語り合いを組織した。たとえば、次のような約束事の下で、多声楽的な対話を演出し、複雑な教育実践の総体を再解釈し、再設計（リデザイン）できるように舞台演出を行った。それは、「聴き手は、語り手によって物語られている登場人物の理解に意識を集中し、物語る人の指導や支援の在り方への価値づけは一旦保留すること」、「語られている他者としての登場人物がそのとき感受していたと推察される生活世界を、わかりはじめた複数の文脈のなかで想像してみること」、「語り手を教育的に説諭したり、自分の狭い価値観で評価したりすることは厳に謹んで、その語り手の経験を追体験しつつ理解するための『問い』を大切に交流し合うこと」などであった。

これらの PGC の過程で、もっとも重視した実験デザインの指標は、省察的实践研究における語りの位相転換であった。それを整理したのが、次の表 1 である。

表 1：省察的实践語りの位相

（拙論：日本教育方法学会編『教育方法』第 47 巻所収）

薄い省察語り	厚い省察語り
子ども「不在」の語り	子ども「実在」(現在)の語り
生活的概念又は科学的概念のいずれかに閉ざされた語り	生活的概念と科学的概念との往還による学問探究へ開かれた語り
独話的で独善的で価値固着的な語り	対話的・多声楽的で価値創造的な語り
認知レベルの語り	認知 - 情動 - 身体の総体の語り
語り手の実践における困難・葛藤に触れることを回避する語り	語り手の実践における困難・葛藤に立ち止まる語り

研究者であれ、実践者であれ、あらゆる省察的实践の語りには以下の 5 つの位相が存在し、それぞれの位相において 2 つのベクトルが存在する。1 つ目の位相は、子どもの語り・物語への顧慮という位相である。そこでは、子ども不在の省察語りか、子ども実在（現在）の省察語りかが問われている。2 つ目の位相は、学問・文化の探究という位相である。そこでは、自分が実感している生活概念に深く触れながらも、その探究が科学的概念の探究に開かれているか、それとも、多弁ではあるが生活概念を這い回るだけで、いっこうに科学的概念に開かれない省察語りであるかが問われている。3 つ目は、対話性の位相である。そこでは、モノローグで独善的な価値解釈の省察語りか、対話的・多声楽的で新たな価値創造にひらかれた省察語りかが問われている。4 つ目の位相は、包括性の位相である。そこでは、認知レベルの省察語りか、認知—情動—身体というホリスティックなレベルの省察語りかが問われている。5 つ目の位相は、葛藤定位性の位相である。そこでは、安心と安全が保障された場において語り手の困難・葛藤に立ち止まる省察語りか、語り手の困難・葛藤を意識的に回避する省察語りかが問われている。これらの位相転位が、PGC の基本となる指標であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 47
2. 論文標題 教育方法学は教育実践をどのように語るのか 詩的・物語様態の定性的データに基づく省察と叙述の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育方法	6. 最初と最後の頁 123-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根岸良久・庄井良信	4. 巻 16
2. 論文標題 絵本の読み聞かせと社会情緒的コンピテンスの涵養 幼小接続期におけるALの原初形態に関する教育学的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 1
2. 論文標題 現職教師の心的情動体験への思慮深さ 臨床教育学の問いとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床教育学と保育・教育実践	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 16
2. 論文標題 学校臨床心理における叡智と思慮深さ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校臨床心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 2
2. 論文標題 臨床教育学からみた学習集団研究の課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習集団研究の現在	6. 最初と最後の頁 138-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 757
2. 論文標題 セレンティのある居場所 子どもの幸せ (well-being) の社会的基底	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 公益社団法人全国私立保育園連盟機関誌『保育通信』	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 753
2. 論文標題 ナラティブ・ラーニングの世界	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 公益社団法人全国私立保育園連盟機関誌『保育通信』	6. 最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄井良信	4. 巻 774
2. 論文標題 他性 (Alterity(オルタリティ)) への存在論的な承認 豊かなコミュニケーション・再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 公益社団法人全国私立保育園連盟機関誌『保育通信』	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 庄井良信
2. 発表標題 教育者（educator）としてのアイデンティティの<新生> リサーチベースの探究に寄り添う教師教育者
3. 学会等名 日本臨床教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 庄井良信
2. 発表標題 現職教師へのナラティブ・コンサルテーションと臨床教育学
3. 学会等名 臨床教育学研究会（第4回）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshinobu Shoi
2. 発表標題 Narrative poetics and Vygotsky's theory of emotions: To elucidate a scenography of 'narrative learning environment'
3. 学会等名 5th International Congress of the International Society for Cultural-historical Activity Research（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 庄井良信
2. 発表標題 語り合う身体から演劇的な意味創造へ 保幼小の失われた環（Missing-link）としてのナラティブ・ラーニング
3. 学会等名 日本教育方法学会第53回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 庄井良信
2. 発表標題 現職教師の心的情動体験への思慮深さ 臨床教育学の問いとして
3. 学会等名 日本臨床教育学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshinobu Shoi
2. 発表標題 Research Field of 'Clinical Study of Education' as an Axis of Curriculum Development for Teacher Education: Focusing on the Promise of 'Narrative Learning'
3. 学会等名 The 8th Pacific Rim Conference on Education（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

庄井良信編「ピア・グループ・メンタリング (PGM)研究成果資料集録」北海道教育大学大学院教育学研究科・学校臨床心理専攻・臨床教育学研究室、2020年3月

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考